
新世紀エヴァンゲリオン～大切な者～

kein

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新世紀エヴァンゲリオン〜大切な者〜

【Nコード】

N3759C

【作者名】

kein

【あらすじ】

何度も逆行を繰り返すシンジ。かなり性格が変わり、顔立ちも整ってきていた。次の逆行の時は、思わぬ人物の手紙を読むことになる。そして、使徒は更に強くなる。

プロローグ

ザザ〜ン……………。

ザザ〜ン……………。

ザザ〜ン……………。

「はあ〜、またやつちまった、くそつたれ」

2015年、ここ地上はサードインパクトにより全ての人類が生命のスープ、LCLに還った。一部の愚かな者達の愚かな行為によって……………。そして残ったものは崩壊した建物とこの血の匂いのする赤い海。

だが、それとは裏腹に愚痴を言う、結構顔立ちが良い少年。仰向けに倒れる。

「……………前は、天界や魔界にいきなり関わることになるし、いろんなものを身につけていくことになったしなあ……仕方がない、もう一度やるか」

そして、立ち上がるこの世界の依り代とされた少年、碇シンジ。黒く長い髪を掻き揚げ、紫色の瞳を赤い海に向ける。

「来い、ロンギヌスの槍」

シンジが手を突きだし、呟くと、宇宙から飛来してシンジの手に収まる人間サイズの二又の赤い槍。

「使徒が来る、二年前へ」

ロンギヌスを地面に突き刺し、呪文を言う。

「転送、ディラックの海!!!」

ロンギヌスから激しい光が放たれ、その槍から黒い影が出る、シンジはロンギヌスから手を離し、ディラックの海へと入っていく。

シンジを飲み込んだ後、ディラックの海も無くなり、ロンギヌスが音を立てるまもなく、砕け散った。

後に残ったのは、赤い海だけだった。

第一話 使徒、襲来

第三新東京市

2005年に新型N2爆雷によるテロで壊滅的な打撃を受けた東京都に変わって、急遽、長野県松本市に暫定的な都市が建設された。工事からわずか三年で新東京は首都としての役割を果たす所まで急成長する。

それが第二新東京市。

そして、政府は次の段階に第二新東京に続く次の都市の建設に着手した。

建設場所は神奈川県箱根町。

三番目に作られし東京。

つまり、これが第三新東京市である。

- 西暦2015年 -

蝉の鳴き声の中、国連軍の戦車が海岸沿いに並んでいる。海からくる何かを迎え撃つかのように。

「目標確認」

「距離200」

「砲身2時の方角へ向ける」

その「何か」は水飛沫とともに現れた。

「攻撃開始!!!」

巨大な爆音が響き渡る。

正体不明の移動物体は依然本所に向かって進行中。』

『目標を映像で確認、主モニターに回します。』

巨大なモニターに映し出される謎の巨大物体。

それを見て初老の男が言う。

「15年ぶりだな。」

サングラスをかけた男がそれに答える。

「ああ………間違いない。使徒だ」

『ツー、ツー、ツー』

「やっぱり、駄目だな……ま、当たり前だな」

がちゃんと受話器を置き、テレフォンカードを取る黒髪の長い少年、シンジ。

夏の風が、シンジの髪を撫でる。

「しかし、良く俺の居場所が分かったな、あの髭親父は」

黒いコートのポケットから一枚の手紙を取り出す。

そこには、

『来い ゲンドウ』

と、

『来て頂戴（はあと） ユイ』
があった。

「………こいつら、抹消した方が良いか？」

額に青筋を浮かべるシンジ。

冷静になり、手紙をバラバラに引き裂き、それを捨てて、目の前にある白バイ（！？）に跨りエンジンを掛ける。

「……さてと、ネルフへ直行するか」

白いヘルメットを被り、バイクを走らせるシンジ。

向かう先は、第三新東京市。

<第三新東京市・ネルフ本部発令所>

『目標は依然健在。第三新東京市に向かい進行中』

「航空隊の戦力では、足止めできません」

「総力戦だ。厚木と人間も全部あげる」

「出し惜しみは無しだ！！なんとしてでも目標を潰せ！！」

興奮するあまり軍人の一人が鉛筆をへし折った、少々冷静さに欠くようだ。

UN軍の猛攻は続く。

だがそれも使徒には何の効果もなく平然としている。

「なぜだ！？直撃のはずだっ！！」

「戦車大隊は壊滅・・・誘導兵器も砲爆撃もまるで効果無しか・・・

」

「駄目だ！！この程度の火力では埒があかん！！！！」

その背後で先ほどの初老の男が落ち着いた様に言う。

「やはり、ATフィールドか？」

「ああ、使徒に対し通常兵器では役に立たんよ」

やはり落ち着いて再びサングラスの男が答える、軍人達とはえらい違いである。

軍人たちに電話がかかる。

「承知しました、予定通り発動します」

所変わって疾走中の車中。

シンジを迎えに車を走らせている一台のアルピーノ・ルノー。

「ダア〜何なのよ！！……待ち合わせの時間にチョッと遅れたくらいで、いなくなるなんて！！」

そりゃあ〜昨日飲みすぎた所為で、寝坊したり、地図を忘れて、道に迷って、2時間遅れたのは、悪かったけど！！

ちよつち遅れた位で、行き成り待ち合わせの場所から居なくなるなんて、酷いじゃない！！」

2時間はちよつちじゃないと思うが…………。

相も変わらず、無能な指揮官だな。

ミサトが車窓から外を見ると驚愕の顔で戦闘機が離れていく使徒を

見上げる。

「ちよつとN2地雷を使うわけ!？」

おそらくこれから来るであろう爆風という名の衝撃にミサトは考えるだけで背中に冷汗が流れるのを感じた。

とっさに伏せるミサト。

数瞬後、辺りに衝撃波が走り抜ける。

彼女の車はたまらず吹き飛ばされる。

「やった!!!」

軍人の一人が立ち上がり叫ぶ。

「残念ながら君たちの出番はなかったようだな」

初老の男とサングラスの男を見ながら言う。

『衝撃波来ます』

センサーと主モニターの映像が消え、代わりにサンドストームが映る。

『その後の目標は?』

『電波障害のため、確認できません』

「あの爆発だ。ケリはついている」

自信満々に言い放つ軍人の一人、一体何を根拠にした発言なのだろう。

『センサー回復します』

『爆心地に、エネルギー反応!』

「なんだとおっつ!!!」

自信満々だった軍人の一人がその報告に愕然し叫ぶ。

『映像回復します』

モニターにはほとんど無傷のまま残っている使徒。

立ち上がって驚愕する軍人たち。

「わ、我々の切り札が……。」

「なんてことだ……。」

「化け物め!!!」

一人が悔しげに机を叩き、軍人たちは力無く座り込んだ。モニターに映る爆心地に佇む使徒。

さしもの使徒もあの爆撃に少しは傷ついた様である。顔の様な物の下から新たな顔がもう一つ増えている。

「予想通り自己修復中か」

初老の男がモニターを見て言う。

「そうでなければ単独兵器として役に立たんよ」

サングラスの男が答える。

その時、使徒を映像を送っていたヘリが使徒の放った光線で破壊され再び映像が途切れる。

どよめきがあがる。

「ほう。たいしたものだ。機能増幅まで可能なのか」

「おまけに知恵も付いたようだ」

「この分では再度侵攻は時間の問題だな」

そう言う初老の男とサングラスの男だが、まるで驚いた風でもなく動じてもない、相変わらず冷静そのものだ。

モニターには先ほどとは違う角度で再び使徒が映る。

サングラスの男と初老の男が軍人たちと向き合っている。

「今からこれより本作戦の指揮権は君に移った。・・・お手並みを見せてもらおう」

電話を置くと軍人の一人が苦々しく言う。

「了解です」

サングラスの男が答える。

その受け答えに皮肉混じりの質問を返す。

「碇君。我々の所有兵器では、目標に対し有効な手段が無いことを認めよう」

「だが、君なら勝てるのかね？」

碇と呼ばれたサングラスの男。

碇ゲンドウはサングラスを押し上げもって返す。

「そのためのNERVです」

「・・・期待しているよ」

捨てゼリフを残とテールブルが沈み本部から退場していく軍人達。

『目標は今だ変化なし』

『現在迎撃システム稼働率7.5%』

「国連軍もお手上げか。どうするつもりだ？」

初老の男、冬月コウゾウがゲンドウに訪ねる。

ゲンドウはしばし顔を伏せた後、再び顔を上げ高々を指令を出した。

「総員第一種戦闘配備！」

「総員第一種戦闘配備！！」

「地对地戦用意！！」

発令所が慌しく動き出す。そんな発令所とゲンドウを見ながら冬月は一度ため息を着いた。

「レイは戦闘には耐えられん。つまりパイロットがいないぞ？」

「ふ。問題ない。すぐに予備が届く」

「・・・自分の息子を予備扱いとはな」

冬月の言葉には答えず、ゲンドウは黙ってサングラスを上げた。

ネルフ・第三ケイジ

赤木リツコが初号機の最終チェックを行っていた。

其処に、保安部から連絡が入る。邪魔をされて不機嫌になるが、一応出る。

『正面ゲート前にサードチルドレンと思われる少年がいます。』

「?.....ミサトは？」

『.....いけません。』

「まあ、多分寝坊でしょうけど、私が迎えに行くわ」

そう言って、通信を切り、溜息をつくりツコ。

駐車場に白バイを止めていくシンジ。

そして、ネルフ本部へと向かう。

第二話 エヴァンゲリオン

「暗いから気をつけてね」

リツコがスイツチを入れると、フロア全体に明かりが付き、シンジの前に巨大な顔が浮かび上がる

動く気配すらないその機体は、まるで眠っているようだった

「人の造り出した究極の汎用人型決戦兵器。人造人間エヴァンゲリオン、その初号機。」

建造は極秘理に行われた。我々の人類の最後の切り札よ。」

目線は初号機に向けられていわれる説明。

科学者としての誇りかその顔は誇らしげにも見えた。

「（今まで、考えたこともなかったなエヴァンゲリオンの意味が福音伝達者だなんて）」

シンジは初号機を見てそう思った。

短い静寂があたりを包む。

しかしそれは唐突に砕かれた。

「久しぶりだな・・・シンジ」

初号機の頭の延長上の空間。

そこに碇ゲンドウ・・・彼はそこから自分の息子を見下ろしていた。だが、シンジは無視し

「で？これがなんだと？」

両手を左右に広げ訳が分かりませんと言った表情になる。

「え？ええつと」

「・・・説明も無しに素人を乗せるのか？というか、あんたらつて馬鹿だな、はつきり」

「な!？」

いきなり、馬鹿と断言させられた事に、声が詰まるリツコ。

「説明するのかしいのか、どっちか決める髭」

「・・・乗るのなら早くしろ、出なければ帰れ!」

「あつそ、そんじゃ帰らせてもらつわ、二度とあんな手紙よこすな」
スタスタと帰っていかうとするシンジ。

「あ！ちよ、ちよつと待って！！！」

我に返つたりツコが、シンジを引き留める。

シンジが足を止めリツコに振り返る。

「何かご用で？」

「・・・お願いします、エヴァンゲリオン初号機に乗ってください」と、頭を下げた。

「・・・最初からそう頭を下げて、お願いすれば良いんだよ、この司令は頭を下げることにすらできないのか？」

そう言つて、あざ笑うシンジに怒りを抱くゲンドウ。

「本当に御免なさい」

「良いぜ、乗るよ、俺が」

(機動シークエンスを書くのがメンドイので、省略させて頂きます)

(いっぺん死んでろ：シ)

ズガオオオオオオオン！！！！

(ぎゃあああああああ・・・チーン・・・)

少々、遊んでしまいました、申し訳ございません。

『発進準備！』

そしてゲージ内は『エヴァンゲリオン初号機』の発進準備が次々行われていく。

『発進準備』

『第一ロツクボルト外せ』

『解除確認』

『アンビカルブリッジ移動開始』

『第二ロツクボルト外せ』

『第一拘束具除去。続いて第二拘束具除去』
次々と進められていく発進プロセス。

『一番から十五番までの安全装置解除』

『内部電源、充填完了』

『外部電源用コンセント、異状なし』

解除されていくガントリーロック。外れていく拘束具。

『エヴァ初号機射出口へ』

固定台ごと移動し、発進口へと送り出される。

巨大な昇降機にセットされる初号機。

次々に開いていく装甲シャッター。

『進路クリアー。オールグリーン』

『発進準備完了』

その報告を訊くと、リツコは振り返り、碓司令を見やった。

「発進準備完了。よろしいですか？」

何故、ミサトのポジションにリツコがいるのかというと、まだ、戻
ってきていないのである！（怪盗である風）

だから、リツコが動かしている訳だ。

まあ、ミサトの場合、居ても居なくても変わらないと思うが。

「もちろんだ、使徒を倒さぬ限り我々に未来はない」

そう言い切った碓の隣で、冬月は正面をむいたまま小声で話す。

「碓。本当にこれで、いいんだな」

しかし、碓ゲンドウは沈黙したまま答ええない。

冬月はハナから返事を期待していなかったのかそのままスクリーン
を見守るのに撤していた。

しかしその態度に、彼らのいる司令席の壁に寄りかかって全てを見
守っていた白衣の女性達は顔をしかめていた。

そして、リツコが言葉を放つ。

「発進！！」

地上に撃ち出されるエヴァ初号機、

目の前には水を司る天使第三使徒サキエル。

果して、導き出されるのは……絶望か……希望か……。

『エヴァ初号機！リフト・オフ！』
ガシャンッ！！

初号機の拘束が外れる。

「……少し違う？」

シンジは前とは違う、何かを感じ取った。

（まさか、七天使が？）

『シンジ君、大丈夫？』

リツコが、声を掛ける。

「ああ、平気だ」

（考えるのは後回しだ）

「武器は？」

『今のところ、プログナイフしかないわ』

「援護は？」

『殆ど機能してないわ』

「最悪だな、作戦は？」

『無いわ、取り敢えず頑張つて』

「今に始まったもんじゃないしな」

初号機は、使徒に数回打撃を加える。

それだけで、使徒が吹っ飛び、ビルをなぎ倒しながら倒れる。

初号機はプログナイフを装備して跳躍し、サキエルに飛び蹴りを食らわせようとしたが、赤い光の壁、ATフィールドに阻まれた。

「ATフィールド……」

「ATフィールドがあるかぎり使徒には有効な攻撃を加えられない。

」

『ATフィールド展開。』

初号機がATフィールドを展開する。

「嘘でしょ……」

「初号機もATフィールドを展開！位相空間を中和していきます。」
「いえ、侵食しているのよ。」
リツコがマヤの言葉を訂正する。

ATフィールドが破られる所へサキエルが光のパイルを撃ち出すが
プログナイフで全て斬り伏せる。

そして、追撃しようとして、プログナイフをコアへ叩き込もうとするが、
身の危険を感じたサキエルがそれを避ける。

だが避けきれずに人間で言う右肩に突き刺さる。

そして、初号機はサキエルのコアに対して執拗な打撃攻撃を加え始
めた。

サキエルのコアに罫が入り始めた。

するとサキエルが手からパイルを連続で撃ち始める。

それすらも、たたつ斬る初号機。

そして、構える。

「抜刀術”神斬”！」

光速を超えるような連続攻撃がサキエルのコアに斬りつけられる。

そして、

パキイイイン！！

最後の突きで、コアが砕け散りサキエルの肉体は倒れる。

『使徒撃退完了』

シンジのマイク越しの音が酷く響く。

その頃ミサトはネルフ本部を迷っていたりするのはまた別の話。

「発令所はどこよーーーーー！！！！！！」

第三話 住む家

「まったく……もう朝か」

病院の庭にあるベンチに座って、そう呟くシンジ。少し、その場でじっとした後、

「……家でも探すか」

立ち上がって第三新東京に向かい、広い部屋を探す。それに、

「あんな奴らと一緒に住むのはごめんだな」

と、両親達を毛嫌うのである。

第一次頂上決戦跡地

仮設テントの中、目の前のテレビでは事実を語らない、嘘に塗り固められた発表がされていた。

「発表はシナリオB 22か。またも事実は闇の中ね」

防護服に身を包んだミサトが、暑そうにウチワを仰ぎながらそう言う。

ミサトはただでさえ気温は殺人的だというのに、この上さらに暑苦しい防護服など

着ているせいで、ミサトは最悪な気分だった。

「広報部は喜んでたわよ、やっと仕事が出来たって」
そう言うリッコも防護服を着ていた。

しかし汗一つ掻いていない。

ミサトはリッコの言葉を後ろに聞きながら、座っている椅子に深くよりかかる。

「うちもお気楽なもんね」

「どうかしら？ 本当はみんな怖いんじゃない？」

「……かもね」

ミサトは初号機と使徒との戦いの記録に目を通したときの恐怖心が拭えないでいた。

ミサトとリツコは、今 巨大な爆心地の中心にいた。

「やっぱクーラーは人類の至宝、まさに科学の勝利ね」

トレーラーの中で、クーラーの冷気を感じ、ミサトは気持ちよさそうに目を閉じる。

「シンジ君、気付いたそうよ」

車内電話で、病院からの連絡を受けたリツコがそう言うと、ミサトは静かに目を開けた。

「……で、容態はどうなの？」

「ぜんぜん。いたって健康体よ、それに、第三にある家に住んでじつとしてるって」

「あっそう」

「はあく疲れた」

部屋に入って、出た言葉がこれだった。

まあ、無理もないか……

ここは、高級マンションの最上階。

中は、結構広い。

キッチンには電気コンロに自動洗浄機、大型冷蔵庫ヒール君（だったかも？）、それからリビングにはお掃除楽々君クーラー（だったかな？）に大型、デジタルハイビジョンテレビがあった。

正に豪邸。

「……七大天使か……少将にちよつと頼むか」

と、起きあがり、携帯電話を掛けた。

何処へ連絡をしたのだろうか。

電話をした後、シンジは携帯をしまい、料理を作って静かに夕食を

食べた。

第四話 学校

バシャー!!バシャー!!

洗面所で、顔を洗うシンジ。

キュ……

水道の蛇口を閉め、傍にあるタオルで顔を拭く。

「……もう一週間か」

そう、ここに来てから早、一週間が経ったのだ。

いくら、ネルフ所属だからとはいえ、学校に行かないと言っつのは拙い。

という訳で、今日が第一中学に転校する日だったのだ。

「……そろそろ時間だな」

腕時計を見てそう呟き、護身用の刀を差し、お弁当を鞆の中に入れて玄関へと向かう。

「……行って来る」

そう言っつて、駆け出した。

第壱中職員室の前には人だかりが出来ていた。

「すまないが、今日転校してきた碓だが……」

シンジが教員達に声を掛ける。

すると、一人の男性教員が近づいてきた。

「ええと、君がシンジ君か？」

「ああ」

「すまないが、HRが始まるまでここで待っていてくれ、もう少しで始まるから」

シンジを応接室に案内する。

「それと、本当はもう一人来る予定だったんだが」

「え？もう一人来るはずだったのか？」

担任のコウスケは

「（ははは・・・しょうがないか）」

と思いつながら黒板にシンイチ達の名前を書いていく。

黒板に大きく『碓シンジ』と書かれた。

「え」と、転校生だ、みんな仲良くするように、自己紹介を

「ああ、今回、転校してきた碓シンジだ、よろしく」

そう言つて、微笑む。

もちろんこの時、女子の大半がこの笑みの虜になり、男子は無言の圧力をシンジに向けたところを言うまでもない。

ちなみに、この時男子のメガネマンは、

「（売れるぞ〜!!）」

と心の中で叫んだが、それはまた別の話である。

「じゃあ、碓の席は洞木の隣の席に座つて」

「ああ」

コウスケに言われ、シンジは指定された席へ向かう。

「・・・このクラスの委員長を務めている洞木ヒカリよ。よろしくね、碓シンジ君」

ヒカリは委員長として、微笑んで挨拶をした。

「ああ、よろしく」

シンジも、微笑みながら応える。

それは、まるで、聖母のような笑みだった。

そして、それに落ちたヒカリが取った行動は
ガシッ

「？」

シンジの右手を両手で包んでこういった。

「ヒカリって呼んで！」

「は？」

いきなりの言葉にシンジは啞然とする。

「「「「「「「「「「「「ヒカリ〜!!! 抜け駆けはするいわよ

第五話 第四使徒、シヤムシエル

あれから二週間が経過した。

トウジとケンスケは昔と同じようにシンジの大親友となった。

と言うよりも、しっかり者のシンジと二馬鹿の二人というへんな噂があったが。

まあ、兎も角、今では良好という形になっている。

ピピピピッ！！！！！

シンジの携帯が鳴り電話に出る。

その顔は、聖騎士の顔だ。

「ああ、そうか、分かった」

「なんや、まさか使徒って言うやつが来たんかいな。」

トウジが心配そうに言う。

「そうだ、それから、外の戦いが見たいからって、シエルターから出るなよ」

その言葉を言い残し学校の外に出ると其処には既に車が来ていた。

「これに乗ってください！！」

黒服の男がシンジに向かって言う。

シンジが車に乗り込みすぐに車は出発した。

本部に到着すると、直ぐさまプラグスーツに着替えエントリープラグ内で待機するシンジ。

数分後 ネルフ中央発令所

『目標を光学で捕捉！ 目標、領海内に侵入しました！！』

その報告を聞き、ミサトは頷くと発令所員全員に向かって宣言した。

「総員第一種戦闘配置！！」

そのミサトの宣言により、第3新東京市は普段の姿とは別の、対使徒戦迎撃要塞都市としての姿を現し始める。

『第3新東京市、戦闘形態へ移行します。 兵装ビル、現在の対空迎撃システム稼働率は48%です。』

そのアナウンスと共に、発令所のサブモニター内の天井都市では通常のビルが地下に格納され、その跡には迎撃用の兵装ビルが出現していく。

ミサトはその様子を横目で見つつ、もう一つのサブモニターに映るシンジに向かって確認を取る。

「シンジ君、準備は良い？」

ミサトの問いかけに目を開き応えるシンジ。

『ああ、いつでも良いぞ』

そのシンジの返事に安心したミサトは、今回の状況について思いを馳せる。

「・・・それにしても、碓司令の留守中に第4の使徒襲来か・・・
・思ったより早かったわね。」

そのミサトの呟きに、作戦部付きのオペレーター日向マコトが答える。

「前は15年のブランク、今回はたったの2週間ですからね。」

「全く、こっちの都合はお構いなしってとこね。 女性に嫌われるタイプだわ。」

二人が発令所の緊張をほぐすために無駄話をしている間にも

丘陵に設置されたミサイルポッドから一つ数百万ドルもするミサイルが惜しげ無く打ち出され

ロープウェイに偽装されたバルカンから使徒に向かって弾丸の雨がもたらされるが

鳥賊のような不思議な形状をした使徒 シャムシエル はその怒濤の攻撃を無視し悠々と此方へと進んでくる。

「全く、税金のムダ遣いだな。」

その様子を見ていた副司令の冬月がそう呟くと

それに反応したかのようなタイミングで中央作戦司令室付きオペレータ青葉シゲルのコンソールにあるホットラインに連絡が入る。

「葛城一尉！！ 委員会からエヴァンゲリオンの出動要請が来ています！！！」

「五月蠅い奴らね。言われなくても出撃させるわよ。」

ミサトは、青葉からの報告に忌々しげにそう答えた。

「シンジ君、今回、パレットガンは使わないわ、その代わりに……」

「アクティブソードとマゴロク・E・ソードを使うわ」

初号機の両腰には青と紫の鞘が着いている刀だった。

『そうか』

「危ないと思っただらすぐに引きなさい、良いわね」

ミサトの言葉に少々驚きながらも

『俺は逃げない、引くこともない、ただ前進あるのみ』

そう言っつて、フツと微笑む。

大半の女性職員が落ちた。

「エヴァンゲリオン、発進！！」

そのミサトの命令により、初号機の足下に火花が迸り次の瞬間、リフトは凄まじい勢いで天井都市へと上昇してつた。

……とある場所……

巨大な空間の中、おそらく城の中だろうか……其処に七人の天使がいる。

正義の天使『ミカエル』

真理の天使『カブリエル』

癒しの天使『ラファエル』

義の天使『ウリエル』

地球の天使『ラゲエル』

邪視の天使『サリエル』

幻影の天使『レミエル』

彼らは”七天使”と呼ばれていて神に近い実力を持つという。

「レミエル、第四使徒シャムシエルの方は？」

天界一の実力を持つミカエルがレミエルに聞く。

「ああ、ばつちりだ。ちゃんと仕掛けてきた。」

七天使の一人、カブリエルが皆に言う。

「私は『予定書』どつりにしたほうがいいと思うんですけどね・・・

」

その言葉にウリエルが答える。

「しょうがないさ、予定外な事にあいつがいる。こちらがまだ手を

出せない状況だから排除するわけにもいかんしな。」

「なんでだ！！あいつなどすぐに排除できる！！！！」

レミエルが叫ぶ。

「無理だな、そう簡単にはいかないだろう。ともかく個人行動は避

けたほうがよさそうだ。」

サリエルがレミエルに注意する。

「とにかく今は動く時ではない、サリエルの言った通りに個人行動

は避ける、以上だ。」

ミカエルがこの場にいる全員に言う。

すると其処にはもうただ一人残して皆消えていた。

「・・・・・・シンジ・・・・・・」

・・・・

その言葉を呟いた人物はみんなと同じく消えていった。

第六話 必殺剣、天空切断

シヤムシエルが第三東京市の戦闘区域に入る。

その3ブロック後ろに初号機が下から出てきた。

「お手並み拝見」

そう言つて、二本の刀を鞘から抜く。

「でいやあああああ！！！！！！！！！！」

ズガン！！バギン！！ガキン！！

初号機を瞬時に近付けさせ、斬りつける、が、シヤムシエルも、光の鞭で反撃する。

バチン！！！！バシユン！！！！

「っち、やはり、アイツラの力を持っている此奴にはあまり効かないか、なら」

瞬時に後ろへ後退して、構える。

「少々本気でやらせてもらおう！」

シユン！！ザギユウウウ！！ドボ！！

シンジが横へ薙ぎ払うように斬ると鎌鼬が飛んで、シヤムシエルの鞭を根元から切り落とす。

『ナイス！！シンジ君！！』

ミサトが褒める。

「そろそろ、終わりにしようか」

そう言つて、屈んで大きく飛んだ。

「はあああああ！！必殺剣！！天・空・切・断！！ウラアアアアア！！！！」

初号機が二本の刀を振り下ろすようにたたつ斬る。

防御をしよう鞭を絡ませたが、それも構わずコアが三つにスライスされた。

ズズンッ！！

初号機が着地をし、戦闘を終了した。

「・・・疲れた、帰ってさっさと寝ようか」
そう呟いて、歩いていると。

「お久しぶりですね。シンジさん」
後ろの方から声が聞こえた。

振り返ると其処には流れるような金髪でその髪は腰まで伸ばしている。
る。

身長は170はあるだろう、シンジより小さいがプロポーションは
抜群だ。

(ちなみにシンジの身長は177センチメートル)

目の色は不思議な銀色の瞳で落ちて着いた雰囲気纏っている。

「そうだな、何年ぶりだろうな、『ラファエル』」

そう言つて、睨みつけるシンジ。

「てつきり、『ミカエル』が来ると思ってたんだがな」

「ミカエルさんは忙しいので私が変わりに」

「嘘だな、ミカエルはかなり冷静で慎重な奴だ、こんな時に使いを
よこす訳がない」

「・・・流石ですね、『あの力』はまだ衰えていないようですね」

「・・・何が言いたい」

「あなたに死んでほしくありません、お願いします。この件から身を
引いてください!!」

ラファエルが叫ぶ。

「断る」

シンジが即答をする。

「何故ですか!!」

「お前は何も分かっちゃいない、俺は一度もお前らを仲間だなんて
思ったことはない」

吐き捨てるように言う。

「もう一度言っておく、テメェらの仲間になつたつもりはない、俺

は俺の道に行く、それだけは憶えて置け」

そう言つて、立ち去ろうとする。

「私は……あの時、あなたの事が好きだった。けど……もう、やり直せないんですか？」

その言葉に立ち止まり、後ろを見ると。

瞳から涙を流す、ラファエル。

「……やり直すことはできる」

「！じゃあ」

「だが、俺はやり直そうとは思わない」

あくまで冷淡に伝えるシンジ。

「な、なぜ……なんですか……何故、何故！」

「先に俺を見限つたのはお前らだ、その時、お前もいたんだろう」
それを言つて背を向ける。

「俺がお前らを見捨てる理由は、それだけで十分だろう、それが分かつたのならさっさと帰れ」

「……」

ラファエルは何も言わない。

ラファエルの瞳から流れる涙は止まらない。

「お願い……グスツ……帰つて……ヒック……来て……」

お願い……お願い！」

その言葉にシンジは応えずにその場を去つた。

その後、ラファエルもその場から消える。

第六話 必殺剣、天空切断（後書き）

シリアス？シリアスなのか？自分で書いて、分からなくなってしまうた。

はい、続きが書けると良いなあと思います。

第七話 姫さん襲来

シンジは今、ミサト達に連れられ、使徒の亡骸を見に来た。

「これがなあ、それにしてもでつかい」

第四使徒の亡骸を見てそう呟いたシンジ。

「それで？リッコ、何か分かった？」

「全然、でも、本当に良いサンプルだわ！！実験したいくらいに！」
その言葉にズザザッ！！と後ずさるミサトと作業員達。

（やっぱり、赤木博士はマッドだったんだ！！）

「で？何か分かったことは？」

冷静に腕を組んで訊くシンジ。

その姿を頼もしそうに見る作業員の人達。

シンジが腕を組みながらパソコンのディスプレイを見る。

そこには601の文字が表示している。

「何コレ？」

「解析不能のコードナンバー」

「つまり、訳判ないって事？」

「そう」

あっさりと認めるリッコ。

シンジも肩を竦めた。

「使徒は粒子と波、両方の性質を備える、光のような物質で構成されているのよ」

「それに、これは、構成素材の違いはあっても、信号の配置と座標は人間の遺伝子と酷似しているしな……っつと、そろそろ面白い物に行かなきゃならんでな、それじゃあ」

そう言つて、立ち去る。

「……ちよ、ちよつとシンジ君！！あなた、どういつ専門知識を持っているの！？」

後ろで叫ぶリッコの声を無視して。

所変わって第一中学校。

シンジはいつものように席に座って、パソコンをいじっている。

「碓君おはよう」

「ヒカリか、おはよう」

隣の席に腰掛けてシンジに話して来るヒカリ。

「ん、先生が来たみたいだ」

がらがらっ

シンジの言葉の後にコウスケが入ってくる。

「あ、起立！礼！着席！」

「今日は転校生を紹介するぞ」

その言葉にどよめく生徒達。

「何いいい！！俺の情報網にはなかったぞ！！」

と、パソコンを弄りまくるケンスケ。

そのケンスケを見て、呆氣にとられるトウジ。

「どんな子かなあ」

「可愛い子だと良いな」

男子軍は、可愛い女の子に期待を寄せる。

「これ以上、女子が増えるのは勘弁願いたいわ」

「そうよ、碓君を手にするのは私なんだから」

「私よ！！」「私」「私」「私」

と、いつの間にか言い争うようになってしまった女子軍。

「どうでも良いが、さっさと紹介してくれないか？」

もの凄く疲れたように言うシンジ。

コウスケは

「あ、ああ、そうだな、それじゃあ、リリアー又さん入って来てく

ださい」

「.....はい？」

.....はい？」

コウスケの言葉に目が点になるシンジ。

扉が開かれそこには、

長いストレートの金髪とボンデー素材を連想させるロンググロブ、タイトドレス、オーバーニーブーツという黒づくめのゴシック・ファッション、頭にはティアラを着けている美少女が教壇の前に立った。

「……………おおおお!!!!」「……………」
「……………おおおお!!!!」「……………」
男子全員からはシンジを除いて歓声を上げる。

女子全員は殺気120%を目の前の少女に向ける。

「今日転校してきたリリアー又さんだ、みんな仲良くするように、それよりシンジ君どうした?」

コウスケの言葉にぴくりと反応しシンジを見るリリアー又。

「……………って!!何で姫さんがここにいるんだよ!!」

ガタン、と勢い良く立ち上がってリリアー又に怒鳴るシンジ。

そして、彼女が取った行動は

「……………久しぶり、シンジ」

と、片手を挙げて応えるリリアー又。

その事にガクツと肩を落とす。

クラスメイト達は一瞬沈黙し、

「……………でええええええ!!!!」「……………」

「……………」

驚きの声を上げた。

(そりゃそうだろうな)

(へ、平穏な日々があ…シ)

そっと、涙を流すシンジだった。

第七話 姫さん襲来（後書き）

この姫さんは、勿論、怪物王女に出てくる姫、その者です。
それに、まだクロスする作品があるし。
結構疲れた、眠い。

．．．．．お休みなさい。．．．グウ

第八話 居住の姫

「はあく、何で姫さんがここにいる訳だ？さななまきちやう笹鳴町さななまきちやうにいるはずだろ？」
学校の帰り道、シンジはリリアーヌと共に家へ帰宅している途中で
あった。

「ただ、暇だったから」

「……それだけの理由でこっちに転校してきたのかコラ」
暇というリリアーヌの言葉に青筋を立てるシンジ。

「そう言えば、姫さんの荷物は？」

ここへ来るくらいだから荷物やらは有るはずだろうと訊いてみると
「シンジの家の中に既に入れてある」

「ちよつとまてや」

よりにもよって、自分の家。

「何で俺の家ン中に入れるんだよ！！そもそも何故俺の家が分かつた！！」

「……迷惑か？」

少し、困ったようにシンジを見るリリアーヌ。

それにより一気に起こる気が失せて、溜息をつくシンジ。

「まったく、今日の夕飯何が良い？」

「……え？」

「だから、今日の夕飯は何が良いんだ？」

と、背中を向け歩きながら問う。

リリアーヌもシンジについて行っている。

「……ハンバーグ」

「オーケー」

それだけ返事をして、後は話さなくなった。

「……まだ部屋は沢山あるからな」

家に戻った一声がこれだ。

取り敢えず、リリアーヌがここへ住むことに依存はないようだった。

シンジはリリアーヌを部屋に案内をすると、一端部屋に戻り、荷物を置いて、ハンバーグを作る為、キッチンへと向かった。

しばらくした後、芳ばしい香りが漂ってきた。

「後は、このソースをかけてつと、出来上がりだな。姫！！できたぞー！！」

その声に連れられて、リリアーヌが部屋から出てきて椅子に座った。

「それじゃあ「頂きます」」

そう言つて、黙々と食べる。

リリアーヌは時切、懐かしそうな顔をする。

「「おやすみ」」

二人は別々（当たり前前だ！！）の部屋に入り、ベッドへと直行した。

「ふう、姫さんが来たとなると、アイツラも来るのか、となると・・・

・・・少将もかな？」

と、溜息をつくシンジ。

「・・・ま、騒がしいことは嫌いじゃないし良いか」

その後、すぐ眠った。

明日には、新しいエヴァンゲリオンが来ることも知らずに。

リリアーヌはもう既に眠っていた。

第八話 居住の姫（後書き）

は、はははは、本当に馬鹿なことやっちゃったな。

エヴァンゲリオンは、零、初、弐、参、四、乙号機が有ります。
敵として、量産型はネルフに入れないようにします。

勿論、奴らにはロンギヌスコピーを持たせていますけどね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3759c/>

新世紀エヴァンゲリオン～大切な者～

2010年10月9日20時59分発行